

## 看取りに対する評価-第7報-

### ～職員を意識調査～

木村 聡<sup>1)</sup> 加藤 綾子<sup>2)</sup> 美原 恵里<sup>3)</sup>

- 1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 介護福祉士
- 2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護師長
- 3) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]当施設では、平成18年度より看取りを取り組み、これまで140例の施設看取りを経験してきた。先行研究では、施設で看取った家族の意見を調査し、老健における看取りの必要性や実際の家族のニーズについて報告した。一方、看取りに関わっている職員に対する意識調査は行っておらず、看取りケアの充実を図るためにも調査の必要性を感じた。そこで今回、看護介護職員を対象に、「施設看取りに対する意識」、「看取りケアの振り返りに」についてアンケート調査を実施し、職員側から見た老健における看取りの必要性や看取りのあり方について検討したので報告する。

[調査対象]入職して1年以上経過し、看取りを経験している看護、介護職員47名を対象とした。

[調査方法・内容]看取りに関する意識調査として、選択式、記述式のアンケート調査を行った。内容は、[1]「施設看取りに対する意識」[2]「看取りケアの振り返り」としてそれぞれ項目には、下位項目を設定し理由等を記載してもらった。

[結果][1]「施設看取りに対する意識」についての設問では、1.「本人が望む最期を迎える場所はどこだと思うか」について、79%で「自宅」を選択した。その理由として、「住み慣れた場所であるから」、「家族に囲まれて看取られたいと思うから」同様の理由が大多数を占めた。2.「看取りを取り組むことは老健の役割の一つであると思うか」について、90%で「思う」、「少し思う」を選択した。その理由としては、「自宅で看取るのが難しい」が最も多く、次に「老健は医療体制が整っている」、「馴染みの場所である」の順であった。一方「余り思わない」を選択した10%の理由として、「最期は自宅で看取るのが良い」を選択していた。「思わない」を選択した職員はいなかった。3.「看取りを取り組むことは、日常のケアと比べ負担を感じるか」について、87%で「感じる」「少し感じる」を選択した。その理由としては、「夜勤帯の責任の重さ」が最も多く、次に「人の死に立ち会うこと」「急変時の対応」の順であった。4.「看取りで大切にしていること」につい

では、「状態変化への気づき、苦痛の緩和」同様の回答が最も多く、次に「身体の保清」「居室環境を整える」「家族の思いを理解する」同様の回答であった。

[2]「看取りケアの振り返り」についての設問では、本人との関わりでは、1.「バイタルサインや状態の変化に注意を払っているか」について、91%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択。2.「本人の思いを深く考えることができているか」について、85%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択した。「本人の思いを理解するために実践していること」については、「表情や反応を注意深く観察する」同様の回答が最も多かった。家族との関わりでは、1.「日々の挨拶、声掛けなどコミュニケーションが取れているか」について、96%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択。2.「情報共有が行えているか」について、85%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択。「どのような情報共有を行っているのか」については、「家族の不安に対し安心できるような声掛け」同様の回答が最も多く、次に「本人や家族の意向や望むことの確認」同様の回答であった。他職種との関わりでは、1.「情報共有が行えているか」について、91%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択。2.「他職種から得た情報やアドバイスをケアに活かしているか」について、88%で「出来ている」、「少し出来ている」を選択。「他職種から得た情報、アドバイスをどのようなケアに活かしているか」については、「身体の観察方法、ケアの注意事項」同様の回答が最も多く、次に「食事形態の変更、嚥下の確認」「安楽なポジショニング方法」同様の回答であった。3.「看取りの実践が日々の利用者、家族、他職種の関わりに活かしているか」については、92%で「活かしている」、「少し活かしている」を選択。4.「看取りを実践していくことは、自身のケアの成長に繋がっているか」については、全職員が「繋がっている」、「少し繋がっている」を選択した。

[考察]今回の調査から多くの職員は、住み慣れた場所で、家族に囲まれ最期の時を過ごせる自宅で看取ることが本人にとって幸せであると考えていた。一方、自宅で看取るのは難しいと感じている職員は多く、馴染みの場所で、医療体制が整っている老健で看取りを取り組むことは、老健の役割の一つであると考えていた。看取りを取り組む中で、職員は、本人の表情や些細な反応から、思いを理解しケアに活かすことができ、家族には、安心して本人と過ごせるような声掛けを行っていた。また、多職種が協同し、それぞれの専門性を活かし本人に関わることができていた。本人、家族、多職種の密な関わりは、まさに老健の特徴を活かしたケアの実践であると思われた。看取りにおける、利用者、家族、他職種との関わりは、自身の専門性とチーム連携の重要性を学ぶ機会となり、看取りの実践が、

自身のケアの成長に繋がる要因と思われた。一方、日常ケアと比べ、人の死に立ち会うことや、急変時の対応、夜間帯での責任性の重さなど大きな負担を感じている職員も多く、今後職員の心のケアやサポート体制の整備を図る必要があると思われた。

[まとめ]今回、看取りを経験した看護介護職員を対象に、施設看取りに対する意識調査を行い、職員側から見た、老健における看取りの必要性や、看取りのあり方を検討した。職員は、自宅での看取ることの難しさを感じ、老健をその代りの場所として考えていた。看取りの実践で本人、家族と崇高な時を共に過ごすことは、自分自身の役割の重要性に気づく機会となり、自身の成長や日常的なケアの質の向上に繋がっていた。老健で看取りを取り組むことは、各職種が専門性を活かしつつ連携してケアを提供できるという面で適切な場と思われた。一方、看取りで、責任性の重さや精神面の負担を感じている職員に対し、サポート体制の整備を図る必要があると思われた。